

## 稲作文化の伝播

分野

歴史

◎地図・写真・統計資料など

土地は往々にして、驚くべき事実を秘めている。

昭和39年、唐津平野を北流する松浦川の東岸、伝説の山、鏡山の東南に位置する水田微高地、宇木汲田遺跡の貝塚の縄文時代晩期の地層から炭化米が出土した。縄文時代の終焉頃にはすでに水稻耕作技術が伝播していたという歴史の新しい頁が開かれた。それから20年後、縄文稲作の起源は菜畑遺跡の発見によってまたも100年近く遡ることになった。

菜畑の谷では、約2,500年前（現在では、3,000年前ともいわれる）に小規模でありながら、矢板や杭で区画された水田と、水路、堰によった取水、排水施設をもった水田が出現していた。また、シカ、イノシシを狩り、漁撈活動を行い、木の実を採集し、畑ではムギ、アワ、ダイズを栽培する等の豊かな生業活動を展開する集落が営まれた。

この稲作のルーツは、長江の中流域、雲南省の三角地帯といわれ、稲作という技術は川を下り、約9,000年前には下流の河母渡遺跡等に高度な文化を生み出した。その後、この稲作にブタ飼育が結びついた文化複合は下流域において国家を形成するまでに発展していく。

日本にたどり着いた稲作は、用水、排水という治水技術による人工的な湿地の維持形成が高度に発達したことにより、可耕地を拡大していく。それは、集落に個人の力ではなく、組織集団としてのムラ社会を形成することをもたらした。つまり、米は米だけでなく、続くクニの概念をすでに故地にもった人々の移動でもあった。水田は偶然の産物ではなく、高度に企画された生産手段であった。

縄文時代は武器のない世界だった。狩猟採集民は基本的に人を対象とする武器は不必要な世界だった。しかし、土地を守り、維持し、水を確保するために人は人と争うことをはじめた。すでに、濠や土塁によって集落を守る戦乱という場から逃れてきた人々は同じ概念で、異郷の地に根を下ろしていった。

陸続と、次々に人々は新しい土地に移動してきた。弥生という時代はこうして始まった。

以来、この日本は「秋津島根」、「豊葦原の瑞穂国」と黄金の稲穂の揺れる、豊かな国といわれた。稲作は急速に日本国中に伝播し、大陸や半島からは新しい金属（青銅、鉄）という文明ももたらされる。金属の武器によって、人々は、より一層、戦闘能力を高め、統一は急速に進み、弥生の王達はこの威信財を手に入れ、力を強めていく。

豊かな森の国であり、一万年続いた縄文時代という狩猟採集民の時代は終わらなかった。稲作は文明というものの、この地方の最初の到来であったのかもしれない。その最初の一步が、種籾の最初の一撒きであった。

私たちの食卓に輝く白い米の収穫は、日本で初めて唐津の菜畑の谷ではじまった。この土地はこんな驚くべき歴史をもっている。

◎引用・参考文献（出典）

◆『西日本文化』

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ  
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：  
[http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts\\_lib/index.html](http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html)